Osaka University Knowledge Archive

Title	人名に使われる漢字の用法の変化について ： 一字一音（一字一拍）の読みを中心に
Author(s)	岡島, 昭浩
Citation	語文. 2023, 121, p. 42-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95426
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

人名に使われる漢字の用法の変化について

――一字一音（一字一拍）の読みを中心に――

岡島昭浩

はじめに

本稿は、命名に際しての漢字の用法の変化（乃至、用法に対する意識の変化）を見るものであるが、まず、筆者の漢字観を確認しておく。現代日本においても、漢字は表語文字であると考える。無論、表音用法と呼ぶべきもの（意味を消して音を示す）[1]や、表意用法と呼ぶべきもの（音を消して意味を示すもの）もあるが、どちらかに限定されているものではない。中国語を写す際よりも、表音のよみの用法、表意のみの法が増えていることは確かであるが、日本語を表すものとしても、漢字は表語機能を保持している、と考える。

そもそも、文字は言語を写すものであり、表音文字であっても、文字列が形態素（乃至、過去において形態素であった（と見なされている）もの）と結び付くのが普通である。[2]ただし、表音文字は、単独の文字ではなく、文字列になってその機能を有する。漢字は、文字列でない単独文字においても、形態素との繋がりがあり（ある場合が殆どで）、表音文字とは異なる。

また、複数の語（形態素）と結び付くことはあっても、語形のない「意味」と結び付くのは、漢字の中心的な用法ではなく（周辺的な用法であり）、表意文字とは言わない方がよい、と考えている。[3]

本論では、名づけの際における漢字の用法について扱うが、漢字の表音的な用法が拡大している状況を見て行くことになる。

略訓の拡大

名乗りにおける略訓の拡大については、池上（1976）が示したが、略訓ということは、意味とのつながりを消すことにつながり、表音的である、と考えられる。なお、実証困難な推測だが、送り仮名の揺れを制限しようとした「送り仮名の付け方」が、略訓の拡大や、漢字の表音用法の拡大を推進した面もあるだろう。「笑」を、「ワライ」「ワラウ」でなく「ワラ」と読む習慣が現在広がっているが、これも、「送り仮名の付け方」の影響下（厳密に言うな

らば、「送り仮名の付け方」の本則のみを正解とし、許容例を正解としない習慣・教育の影響、というべきであろうか）にあるように思える。[4]

略訓は、新野（1996）の纏めた明治以前の名乗にもあるが（『名乗字引』の「示：シメ」、「競：キソ」など）、一拍にいたるものは少ない。そのように解釈されそうなものを挙げると、易林本節用集の「臼：ウ」・「臣：オ」などが相当しようか。[5] 荒木（1959）に載るものでは「生：い」「白：し」などがある。[6]

これが、近年の命名においては、略訓で一字一音（一字一拍）[7]のものが増えている。田口二洲（2016）「読み別 名づけに使えるおすすめ漢字リスト」で「あ」と読むことになっているものは次の通りである。

上安在充有会合当亜吾阿空昂直明和亞宛娃荒称彩逢揚開愛雅

遭編

これは、「あ」で始まるものではなく、「あ」と読める漢字のリストであり、このリストは「あい・あう・あえ・あお・あおい・あか・あかつき・あかね・あき・あきら・あく・あぐ・あけ。あけぼの・あけみ・あさ……」と続く。「あく」の所に「空」はなく、「充」「当」などが見られそうな「あてる」などは無い（「あたる」はあるが「中」の一字のみ）。

略訓由来と見られるものに傍線を施したが、「上がる」「在る」「充てる」などの字を「あ」と読ませるわけである。「明」は「明るい」の略訓という側面と、「明日」の熟字訓「あす」を分解したという面もあるのであろう。「愛」を「あ」と読むような、伝統からは外れる略音も目に付く。「雅」は、アテネを「雅典」と書くことに由来するものであろう。[8]

「あ」以外を見ておくと、「あざ」に「鮮」、「あそ」に「遊」、「あた」に「与辺能」など（与える・辺り・能う）、送り仮名相当の部分を書かない形で、載せているものが目に付く。「いそ」に「急勤磯」が並んでいたり、「ことほ」で「寿」が載るなど、漢和辞典の音訓索引を引き慣れている身には、目慣れない感じを持つものである。

一九八〇年代のワードプロセッサや一九九〇年代に使われていたパソコン用の仮名漢字変換辞書（FEP）において、「あ」の読みで、「上・有・空」などが出るなど、送り仮名を省略した形の仮名文字列から漢字変換することができるものがあったが、[9] ワープロ・パソコン入力用を謳う漢字辞典[10]においては、索引などで、送り仮名の表記を示す「あ・がる」などという表記は多かったものの、[11]「あ」に「上」が入っているようなものとしては、芝野（1997）があたりまで下がる（この手の辞書を集中的に集めたものではないので、そうしたものが他にもある可能性はある）。芝野（1997）の索引で、「あ」の項にあるのは以下のものである。

亜唖娃阿愛芦鮎粟安庵案英加河我雅海蛙栗兄穴吾厚綱荒合朱秋彰昭上新青赤浅相足淡朝天怒束畔泡麻明網有揚亞呀哇噫堊婀晏暖椏痾鑑關鴉

「上」をアと読む用例を見るに、アゲと読む兵庫県の地名「上ゲ」が挙がっている。地名や人名の用例を多く含むのが特徴と

なっているこの辞典であるが、地名・人名を一字単位に積極的に分けた読み方を取り上げていて、このような形になったものである。田嶋（1990）でも、地名の用例を挙げるが、一字単位への分解はなされておらず、索引において、「あ」と読ませているのは、訓では「呀」一字である（音読の「ア」は22字）。

現代における命名の変化については、諸者に論があるが、本稿では、略訓・略音の拡大を経て、人名の漢字における一拍読みの増大の一端を見る。名前の変化には、音形の種類の増大があるが、その増大した音形を表記しうるのも、一字一音の漢字が多くあるからである。

名乗の資料

「名乗」を、『大字典』のように、本文に組み込んでいるものもあるが、小柳司気太『新修漢和大字典』博文館のように、付録のような形で「名乗一覧」として載せるものもある。同書のものは、黒河芳蘭『名乗指南』[12]に拠る旨、明記されているが、典拠を示さないで載せている辞典もある。

新規に編纂したと思われるものとして、長澤規矩也編著の漢和辞典では、『明解漢和辞典』（1959新版）以降、「人名漢字読み方一覧表」を載せている。[13]これは当初、「字形による排列」「読み方による排列」に分けて掲載していたものを、翌年の『大明解漢和辞典』で、一つの表に圧縮した形にし、これが、『三省堂漢和辞典』[14]『三省堂 新漢和中辞典』『新明解漢和辞典』にも継承されて行く。

『新字源』は、一九七六年頃から付録に「人名要覧」を載せるようである。一九八一年の常用漢字告示・人名用漢字の追加による改訂時にも、その追加に関するものの他の増補も若干行われている。一九九二年の『大字源』に、常用漢字に準拠するなど、さらに増補したものを「名のり別漢字一覧」として載せるが（一九九四年の『新字源 改訂版』の「人名要覧」もこれを継承する）、この時点で略訓由来の一拍読みをするものが増えるようである（「当：あ」など）。二〇一七年の改訂でも「名のり別漢字要覧」となり、ここでも増補がある。

『角川最新漢和辞典』（1975）の「人名漢字要覧」は、漢字別のもので、所謂「名乗」に留らず音読みについても拾ってある。ユウと読む字がユとも読むことについて示されているし、ヨウ・ヨについても（「用」）同様である。

漢和辞典類の本文で積極的に名乗を載せているものに『現代漢和辞典』大修館（1996）がある。例えば「愛」に、21もの「名のり」を載せる（漢語林・大漢語林・広漢和では10）。ここには、音訓に入っている「アイ」「まな」は含まれないが、音由来と思われる「あ」を含んでいる。この書は30の読みを載せる『JIS漢字辞典』よりも少し早い刊行だが、これより後のものでも、これに匹敵する数を載せているのは少なく、『漢検漢和辞典』初版（2001）が19、『旺文社国語辞典』第八版が18、[15]と言ったところである。

命名に直接関係するものに目を向けると、国語協会（1940）や吉田澄夫（1951）のような、難訓への反省から、読み方をかなり

絞り込んだものがあり、「お名前博士」として知られた佐久間英の名づけ本も、通用性に乏しい読み方は「あえて省き」という立場のものであった。荒木（1959）や、渡辺（1973）などは、具体的な人名を集めた基本的な資料である。

さて、小林康正（2009）で名づけにおける「たまひよ名づけ本」の強い影響力が指摘されている。福武書店・ベネッセコーポレーションの「たまごクラブ」「ひよこクラブ」に関わる名づけ本が、そのように呼ばれるわけだが、書籍としては、1995年刊の『最新版 たまひよ名づけ百科』以降、多数のものが出されている。表紙に「これはひきやすい！ 音（呼び名）で選べる最新赤ちゃんの名前1万2000例」とあるように、漢字主体ではなく、名前の具体的な音形から漢字表記形を示しているのが特徴となっている。たまひよ以前の名づけ本の類は、漢字ごとの説明（姓名判断に関わる画数・五行などの情報を含めて）が中心で、具体的な名前の音形のリストは示されないものが多い（示されていても漢字ごとに纏められていて同じ音形で異なる表記となるものを見出しにくい）。西沢（1960）、小林（1967）、朝霧（1986）、香川（1986）、脇田（1986）、内田（1990）、山口（1992）、国脇（1992）など、これを載せているものもあるが、名づけ情報の中心をなすものではなく、後掲のように数量的にも1995年以降のたまひよ名づけ本に及ばない。それ以降の名づけ本を見ると、90年代あたりまでの名づけ本は、名づけのためのツールとしては、使い勝手のよいものではなかったように見える。小林（1967）は、国語辞典の付録であるし、脇田（1986）は、所謂名づけ本ではない。

なお、たまひよ以前の「名乗」の類が、どのようなところに掲載され、どのような増補があったかについては、調べが不足している。たまひよ同様に、婦人雑誌の記事に名づけのことが載ることもあったが、名づけのツールとして十分な情報を持っていたようには見えず、単行本として見られる書籍を中心に見て行くことになった。

一字一音のもの

以下、具体的に、一字一音的に使われる漢字を見て行く。

荒木『名乗辞典』は、紳士録などから名前の実例を集め、漢字ごとに名乗を整理したものであるが、音読みのものがあまり取られていないこともあって、「あ」と読まれているものは「吾」のみである（「後篇」の「一音（仮名一字）のもの」で示される）。佐久間英（1981）・中野洋（1987）などの「万葉仮名」では「安亜阿」3字が示されるのみである。上に掲げた田口（2016）の30字との違いが著しい。

実は、「たまひよ名づけ本」でも、万葉仮名として示されるものや、「読み方別漢字リスト」で示されるのは、そう多くない。たまひよ（1995）33頁の「万葉仮名一覧」で「亜阿安」の3字、たまひよ（1995）「読み方別漢字リスト」で「亜阿安吾有」の5字である。阿辻・黒川（2008）の「万葉仮名風の当て字」では「安亜吾阿愛」の5字、「読みから引ける漢字一覧」では、「安在亜吾阿亞

愛」の7字であり、田口（2016）の30字は突出している。

『新字源』「人名要覧」は「主要な名のりによって、常用漢字・人名用漢字を整理したもの」だが、1994年の改版時に、「あ」に「当」が、「い」に「祝泉」、「お」に「丘」など、略訓由来と思われる1拍のものが追加されている（この増補の際に、二拍のものだが、「かす」に「春」など、熟字訓の分割とおもわれる読みも入っている）

「読み別漢字リストで、多くの「あ」と読む字を載せた田口（2016ab）であるが、「音から考える名前リスト」で示される実例の方には、これらの読みが、すべて使われているわけではない。アと読まれている漢字は「亜安吾阿有愛娃明彩」というところである。音の形で、男性名1104種（pp.61-136）、女性名1567種（pp.61-135）載せられており、それほど少ない実例というわけではないのに、実例の方では「上在充空」などをアと読ませる例は入ってないのである。多くの名づけ本では、漢字項目や音訓索引の類では保守的で、実例の方で新奇に見える読みを出している印象があるが、田口（2016）は逆の様相を呈している。

「あ」以外の一字一音の数値については、次に掲げる荒木・佐久間・田口の表を参照されたい。

「る」と読ませる文字が、あまり増やされていないことなど、興味深い点もあるが[16]、表を載せるだけにしておく。

表1　荒木（1959）の一字一音

清	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
あ	1	21	12	6	26	6	10	15	4	4
い	17	30	10	11	5	11	87		4	
う	8	2	13	3	4	8	4	5	1	
え	24	5	3	3	11	1	11			
お	43	9	5	26	4	7	6	20	2	12
濁		が	ざ	だ		ば				ん
あ		0	1	1		2				1
い		0	4	1		0				
う		0	0	1		2				
え		0	0	2		4				
お		0	0	3		0				

表2　佐久間（1981）の一字一音

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	
3	3	11	10	7	9	5	14	21	3	あ
	9		14	12	6	12	38	36	22	い
	4	14	8	16	2	4	10	13	8	う
	4		8	4	8	3	6	14	17	え
	4	10	7	7	6	19	6	20	12	お
				ば		だ	ざ	が		
				2		5	2	5		あ
				4			18	6		い
				6			7	2		う
				3		1	1	7		え
				4		4		12		お

表3　田口（2016）の一字一音

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	
14	11	23	29	28	30	24	41	72	30	あ
	22		65	42	10	23	77	86	53	い
	5	30	16	40	10	29	43	36	36	う
	12		15	6	16	3	12	21	30	え
	12	38	18	30	17	48	24	53	51	お
				ば		だ	ざ	が		
				8		16	3	13		あ
				17			41	18		い
				18			12	12		う
				7		2	1	12		え
				11		5	2	24		お

音形の増大

ここで、名づけ本における、名前の音形の増大を確認しておきたい。西沢（1960）は男女の区別をせず4190の漢字形を挙げるが、音形としては1870種である。小林（1967）が、男性名の表記形6683、音形3090、女性名の表記形1768、音形736[17]、以下、増大の著しい女性名のみをカウントすると（上の数字が表記形、下が音形）

香川（1986）	3625	448
朝霧（1986）	1222	403
脇田（1986）	3020	739

山口（1992）は男性名と女性名の漢字形を1000ずつ挙げるが、男性名の音形は747で、女性名の音形は246である。

たまひよ（1995）の「〝音〟で選ぶ赤ちゃんの名前」になると、女性名の音形が多くなる。[18]

たまひよ（1995）	5407	1404
たまひよ（2003b）	6688	2171
高島（2006）なまえ索引[19]	—	2516
西東（2014）響きリスト　例示なし		2873

と上記で多かった小林や脇田の700超から二倍三倍と増加している。このように増加した音形を表記し得ているのは、一字一音の万葉仮名的な表記があってこそである。例えば女性名として、高島（2006）には「あろよ」が載せてあるが、これなどは、「みり」「りあ」、「あろ」「ろよ」などの二拍に一字を宛てることは困難であるように見え、[20]一字一音のものが求められることになる。

たまひよ（1995）の「音で選ぶ赤ちゃんの名前」の「女の子」[21]の「あ」で始まる3拍の名は、音で84種あり、表記は436種あるが、1字で書くものが9種、2字287種、3字140種である。たまひよ（2003a）は、音で69種、表記250種で、1字10種・2字170種・3字70種。たまひよ（2003b）[22]では、音で128種、表記で407種であるが、1字13種、2字280種、3字114種。一字一音の名の数は増えているように見えないが、（2003b）の時点で、一字一音に使われる字種は増加している。

たまひよ（1995）でアと読まれるものは「亜阿愛安明」の6字であった（「明日（あす）」のような熟字訓は除いてある）。「明香里（あかり）」・「有（あ）梨沙（りさ）」は「明（あ）かり」「有（あ）り」のような、送り仮名的な漢字を伴うものであり、「秋来恵（あきえ）」も送り仮名的（捨て仮名的）[23]なものである。「愛」を「あ」と読ませるのは愛紀子（あきこ）・愛里沙（ありさ）の二例のみである。

たまひよ（2003a）では、例示そのものが少なくなっているが、たまひよ（2003b）では、三拍名のみを見ても「葵茜梓綾杏彩朱青天碧麻」を「あ」と読ませており（綾希子（あきこ）・杏衣理（あいり）・彩夏音（あかね）・朱沙夏（あさか）・青澄望（あすみ）・天使羽（あつは）・麻紗子（あさこ）……。二拍を二文字で書いたものを加えれば、「絢美（あみ）」など）[24]、明・有についても、送り仮名的なものが付加しないものが激増している。

ただし、前述の通り、「読み方別漢字リスト」（2003a:107–110）「読み別漢字リスト」（2003b:423–437）では「安有亜吾阿」の五つのみ

で、増加していないし[25]、「画数から選ぶ名づけ」という章の名で漢字ごとに読みや名前例を示すところでは、「明」に「あ」の読み「あ・あか・あき・あけ」が、「空」にも「あ・から・そら」が示されているが、全ての漢字の所に及ぼしてはない（「天」は「あま・あめ・たか・たかし」「朱」は「あけ・あけみ・あや・あか」、「杏」は「アン・キョウ・あんず」、「青」は「あお・きよ・はる」、「彩」は「あや[26]・いろど・たみ」など）。2018年版あたりになると、「主な読み」には示されないが、漢字ごとの「名前例」のところに「結愛 ゆあ」のようなものが見える。

読者からの情報を集めたたまひよ（1997）では、「愛彩杏亜明綾」を「あ」と読ませている名前が拾える（この本の「読み方別漢字リスト」では、「あ」には「亜阿」のみである）。

たまひよ以外のものでは、阿辻・黒川（2008）の例示から「あ」と読ませているものを拾うと、

亜娃阿愛綾鮎安杏雨鑑鏡暁顕彩讃晶歩明有曜耀藍燿顯

と言ったところであるが、漢字の説明部分などからでは、この読みを探すのは困難である。

たまひよ以前に遡ってみると、西沢（1960）では、アと読むのは「亜」のみ、小林（1967）で「亜安吾」、朝霧（1986）で「亜安阿」、香川（1986）で「亜安阿」だが、脇田（1986）では、「愛生：あおい」「明由子：あゆこ」「有希子：あきこ」「綾希子：あきこ」「麻由美：あゆみ」があり、山口（1992）でも、「有佳里：あかり」「綾希子：あきこ」「愛結美：あゆみ」が、国脇（1992）にも、「彩芽奈：あがな」「有佳里：あかり」「愛希：あき」が、見え、80年代の名づけ本で、略訓・略音由来でア一拍に至ったものが、名づけ本にしばしば載せられていたことが分かる。

命名の際のさまざまな運用

高島（2006）には、

名づけの場合、漢字の読み方は自由で、これらを「名乗り」[27]と言います。名乗りには変則的な読み方が多くあります。

① 「心」を「ここ」、「奏」を「か」など本来の読みの一部を省略したもの

という記述がある。

紀田（2003）、佐藤（2007）でも分析するが、「読みの一部を省略」「読みの一部を利用」というには様々な段階があろうと思われる。上に見た略訓の他に略音もある。

万葉時代の万葉仮名にも略音と見なされるものはあったが、現在の人名万葉仮名においては、それが明らかに拡大している。万葉時代の万葉仮名においては、後接字との関係で韻尾がない形になっているものはあるが末尾のン・ツを抜いた形が中心であった。現在では、「愛アイ」をア、「英エイ」をエと、「央オウ」などをオ[28]、のように、イ・ウを抜いた形[29]や、キ・クなどを抜いた形[30]も積極的に採用している。逆にイ・ウ・ンの添加と思われるものもあるが、これは、読み添えの拡大（助詞（「の」など以外の読み添えも許す、「妃莉：ひまり」のような例）も合わせて考える必要が

あろうか。

略訓は、下略だけでなく上を略したり、中からとったりなども見えるが、略音については明確にそうだというものは見出せていない。「乃音：のん」のように「音」などの字を「ん」と読ませるものもあり、これは、上を略した略音とも見ることが出来るが、「ん」で始まる名前は、これらの書には出て来ず、[31]常に上接字を伴うので、母音が縮約した、というような文字遣い（従来からあるもの）であると見ることが妥当であろう。「ん」に限らず、韻尾の「イウキクチツ」などの1拍を用いて、しかも1字目に使うような例があるのかも知れないが、確例を見出していない。[32]

清濁の通用は、連濁に限らず、どのような環境でも（頭でも）使われるようになってきている。また、濁音を清音に転用したりもする（呉音が鼻音で漢音が濁音であるようなものも、清音で読ませるなど、慣用がなくても通用させる）。

漢字の一部の要素の音訓を音訓として採用するらしいことも目に付く（「柊：トウ」など）。逆に、その漢字と同形のものが構成要素となっている漢字の音訓を採用するものもあり、「史：リ」は「吏」の音を採用したものらしい。このあたりは、画数による姓名判断の影響で字を選ぶことと関連があるものであろう。[33]字形の類似による通用と見られるものもある。たまひよ（1997）（51頁）に、「戒」を「えびす」と読ませている例があるが、これは「戎」が人名に使えずに困っていたところに、たまたまテレビニュースで「戒丸」と書いて「えびすまる」と読む船を見かけてこれに倣ったということである。[34]

熟字訓の分解に関して、「海」はアイウエオのすべての読みを持つ、というのは、以前から言われている。[35]海女・海豚・海胆・海老・海髪の熟字訓を分解したものであるが、言語遊戯に属する事柄であったろうと思われる。「日月」と書いて「たちもり」と読ませるのも、「朔日（ついたち）（一日（ついたち））」「提月（つごもり）（灰月（つごもり））」の熟字訓を分解したものだが、故事を意識した言語遊戯の類であったと考えられるが、これが名付けに多用されている。

荒木（1959）に、「朝：さ」があり、これは「今朝：けさ」を分解したと解することが出来る。現行の名づけ本では、熟字訓を分解した結果、一拍になるものもしばしば見られる。たとえば、リと読むものとして「合」を載せるものがある（弓削1996）。「百合」の熟字訓を分解したものと思われるが、該書のユに「百」はない。注20に載せた、「お名前辞典」では、「絢百：あゆ」など、「百」をユと読ませるものが多く見られる。

熟字訓の分解と似たものとして、連声を含む熟字の読みの分解がある。[36]上接音にンのない「音ノン」「和ナ」がしばしばある。「音：のん」は多数見える。たまひよ（1995）では、「香音：かのん」一例だが、たまひよ（2003b）になると、「かのん」の表記が増えるほかに、「咲音：さのん」「紫音：しのん」など多数が見える。ただ、最新版のたまひよ（2022）でも、「読み別漢字リスト」で「のん」は引けないし、「おすすめ漢字」の「音」の「主な読み」に、ノンは入っておらず、名前例に「花音：かのん」を載せ

るのみである。田口（2016）の読み別リストの他に、東伯（2013）の「読み方別漢字リスト」にも見える。なお、芝野（1997）では、音訓索引に「のん：音」を載せる。本文をみるに、「観音」は姓も地名も分解していないようだが、「千音寺（センノンジ・愛知）」から、ノンを切り出している。「和ナ」について、荒木（1959）の載せる「和：な」は「唐来三和」で連声のナである。『新字源』の1976年版の「人名要覧」に載るし、弓削（1996）・東伯（2013）・田口（2016）などにも載るが、たまひよは最新版でも「読み別リスト」には載せていない（ただし、おすすめ漢字リストの「和」の「主な読み」には、2003bの時点で「な」も入っている。また、2003bの「音から選ぶ名前リスト」にも「希和：きな」などの、連声と関わらない例を拾える。

紀田（2003）が「読まない字を含む」と書いたものには、送り仮名的なもののほかに、迎え仮名[37]にあたる万葉仮名的文字遣いの使用もある。たまひよ（2003b）に載る「愛茜：あかね」「花架：かける」「花奏：かなで」「彩桜：さくら」「弓夢：ゆめ」などは、「茜」の前に「あ」と読まれる「愛」字を書く、迎え仮名的な文字遣いであろう。

小林（2009）や佐藤（2007）が示すような命名（選字）に独自性を持たせたい思いが、伝統・慣習を気にせず、むしろそこから離れようとする際に、言語遊戯的な手法を多用したように思われる。そして、『たまひよ命名実例集』などに見える名前の展覧会は、地口行灯[38]のような言語遊戯の発表会の場にも見える。人の名の読み方を推定する時には、名前らしき音形になりそうな読みを探りながら食い合わせて幾つかの推測することが、一時期のやり方であったが、名前の音形も増大し、そのような方式で名前を推測するのが、益々困難になっているのが、現在の状況であると見ている。

おわりに

命名や姓名判断に関する書籍を集め始めたのは、韻学の伝統を引くと謳う姓名判断（名乗反切や五行など。岡島（2008）（2014）参照）について、どのような記述があるかを気にしたからであったが、これらの書を見る内に、新奇に見える名前・漢字表記を提案するような書であっても、漢字を説明した部分（また、その索引）には、伝統的な音・訓・名乗しか載せていないことが気になって来て、姓名判断的なことが書いてなくても（また、画数にのみ関わるもので韻学には関係なくとも）集めるようになっていった。田口二州（2016）のような、一字に至った略訓を大量に載せる索引の存在には驚かされたが、これは、名づけにおける漢字の当て方の実態を整理したらこうなる、というものであって、そこに至るまでに名づけ本が、また、名づけ本における漢字の読まれ方・読ませ方が、どう変遷してきたかを探りたくなったものである。大量に出版・改訂されている名づけ関連本の全てに目を通すことも出来ず、漢和辞典やワープロ漢字辞典類、また用字辞典類に載せられる名づけ関連資料についても、十分に参照するこ

とが出来ておらず、残念に思うところである。

まずは、略訓による一字一音のような読ませ方は、運用としては或る程度以前からあったが、盛んに運用されるのは遅れるし、辞典的に載せられるのは更に遅れる、ということを示そうとしたものである。名付けの諸書を調べるうちに思考が分散し、本筋から外れるものを注に回したために、注が繁多なものになったし、述べ残していることも多いであろうと思うが、戸籍に読み仮名を付けることになったのを機に、書いておくすることにする。

戸籍に読み仮名を付けるようにすることは、現状のパスポートにはローマ字表記だけで漢字表記がなく、マイナンバーカードや運転免許証には、漢字表記だけで読み仮名がない、というような状況に対応するためにも必要なことだと思われるが、名の読み方を「氏名に用いる文字の読み方として一般に認められているもの」に絞るというのは、運用が難しそうである。本稿で扱った略訓をこの範囲から除外することは、名づけ本の多くがこれを載せている現在となっては、もはや困難であるように思われるが、略訓のうち、一音に至るものの拡大の歴史を見て、頭音以外を残す略訓（略音も）が、これ以上広がらないように（少なくとも名づけ本がそれを推奨することのないように）願うものである。

注

（1）語としての意味を消してもイメージのようなものが残ること（乃至、残せること）は、万葉集時代の万葉仮名における「孤悲」などもそうであるし（澤崎2020など）、現代の人名等の万葉仮名的用法においても同様である。

（2）早田（1977）、河野（1994）参照。

（3）今野（2023）とは立場が異なる。

（4）『たまひよ しあわせ名前事典』では、初版の2003から、漢字別の「主な読み」のところに、「生：い」「加：くわ」「叶：かな」「成：な」「向：む」「好：この」「吹：ふ」「歩：あゆ」「実：みの」「空：あ」「明：あ」「果：は」「周：まわ」「美：うつく・うま」「香：かお」「咲：さ」「奏：かな」「飛：と」「笑：わら」「彩：いろど」など、原則的に、送り仮名を送らない形を載せるようになった。『たまひよ 名づけ百科決定版』（2001）では、このようなものは、一部であった。

（5）池上（1976）も示すように、略訓は、誤解に基づき広まってきた部分がある。「足」をアと読むのは、略訓ではないが、これをアシの略訓と見なし、同じような運用を他の字・訓に対して働かせるわけである。また、「仁和」をニンナと読むのは、ワが上接字の韻尾ンからの連声によってナとなるのだが、これを「なごむ」の略訓であると再解釈する向きもある。また、止（と）は古音に基づく音仮名だが、古音研究以前には「止まる・止む」の略訓と解されていたし、一般的には今なお、そう誤解されやすい

（6）「生駒（いこま）」に由来するものと思われるが「生都子（いとこ）」「妃生子（きいこ）」の例が載せられている。

（7）漢字一字で1モーラを表すもので、「一字一拍」でよいが、万葉仮名の呼び方にならい、「一字一音」と称しておく。

（8）地名の漢字表記は、本居宣長の所謂「地名字音転用例」も、西洋

の地名を中国語の音訳で宛てたものも、熟字訓的に扱われ、分解不能のものとして扱われることがあるが、音に由来するために、分解されやすい面もあるのであろう。「愛」を「あ」と読むのも、アイの略音という面だけでなく、「愛宕」などを分解した、という面もあろう。芝野（1997）では、姓の「愛宕（あたご）」と地名の「愛栄町（あさかちょう）」（島根）からアの読みを示している。「雅」のアには、「雅津子（アツコ）」を載せる。

（9）箭内敏夫（1994）や菊田将克ほか（1989）、SE編集部（1991）などでは、そうした点からの分析は見えなかった。現行の予測変換とは違って、変換用の辞書に、この読みが入っていたものである。たとえば、「あ＝空」がカ行五段動詞のところにあるのはよいが、「単漢字」としても「あ＝空」で登録されていた。

（10）学研辞典編集部（1990）のように、「名前索引」と題して、「人名として使用される訓読み（名乗り）を五十音順に配列」して、人名用の漢字事典を兼ねるようなものもあった。

（11）国語辞典類の見出しでも見られる書き方であるし、漢和辞典の音訓索引でも、『大修館新漢和辞典』『漢語林』などが採用している。

（12）文久三年。国会デジタルコレクションにも掲載。

（13）形式としては、黒河『名乗指南』と似ているが、収められている読みは、かなり多い。

（14）『三省堂漢和辞典』第四版（1990）・『新明解漢和辞典』第四版（1990）に載る43頁に至るものが、最大のものであろうか。

（15）『旺文社国語辞典』では、八版（1992）から、漢字項目に「人名」として名乗が載るようになった。

（16）後に人名用漢字に追加された「瑠」などに加えて、田口（2016）では（これも追加字だが）「昴」が入っており、「すばる」の末音を採用したものかと思われる。「類累」などは変体仮名の字母にもなっていて佐久間が「累」を入れていたが、田口（2016）にはない。

（17）略音とも解せるもので、同書で愛をアと読ませているのと対照的に思える。なお、唐音由来かと思われる「児：る」は、荒木（1959）に青木正児（まさる）が載り、近年のものでも諸書に載るが、田口（2016）には載らない。

男性名の方が音形の種類が多いものが多いのは、男性名が、長いものでは6拍あたりまで存在するのに対し、女性名の方は3拍までが中心で、4拍のものでも、男性名のような2＋2のものが少なく3＋1が中心で、最後の一拍に、所謂「添え字」「止め字」を置くという制限があること（1＋3の「ひまわり」のようなものもあり、また「向日葵」という表記のままで「ひまり」という形を取らせたりもするが、これは4拍の名を避けてのことであろう）などによる。たとえば音形が最も多い西東社（2014）の女性名の音形2874種の内、4拍以上なのは、男性名の混入ではないかと思える5拍の1種「こうしろう」も含めても42種に過ぎない（2拍が513種、3拍が2318種）。男性名は3478種の内、2拍が189種、3拍が1564種、4拍が1452種、5拍以上が273種である。なお、上掲の田口（2016ab）では、男女で同程度の頁数であるのに、男性名の音形が少なくなっている。

（18）これを、小林（1967）と比較してみると、語末音で、ナが4から100に、ホが4から62に、サが3から30に増加していることなどが目立つ。頭音では、リが8から51に、ユが17から77、ホが2から25などが目に付く。

（19）掲載頁の索引であり、同表記のものが複数頁に掲載されていることもあって、表記形のカウントは困難である。

（20）「えれな」「みりあ」（たまひよ（1995）などにある）をその例にしようと考えたが、ネット上の「お名前辞典」（http://name.m3q.jp/）では、「えれな」を「愛叶」「永愛」などの二字で、「みりあ」を「実愛」「碧愛」などの二字で表記しているものがあったことも

あり、高島（2006）に載る「あろよ」にした。同書に拠れば、「あろよ」は「アジア、中東で呼んでもらいやすい名前」とのことで、表記は「阿露夜」としている。

(21) 従来、男性名表記に比して女性名表記の方が、一字一音式のものが多く、佐久間（1978）など、多くの命名本で「万葉仮名」を女性名の頁に載せている。

(22) 「名づけ百科」に加えて「しあわせ名前事典」が登場し、二系統に分かれるようである（「百科」はその後「大百科」「新百科」となる）。監修者はともに、田宮規雄。なお、雑誌の付録に、「しあわせ名前辞典」というタイトルの薄い小冊子がある。また、2013年版から監修は栗原里央子となる。ただし、2012版と2013版とでは、年別の人気名前などが違うばかりで、本稿が対象とするような「音から選ぶ名づけ」「読み別漢字リスト」などで大きな差はない。

(23) 送り仮名全般を「捨て仮名」と呼ぶほかに、現在の送り仮名（内閣告示「送り仮名の付け方」昭和48年に基づくもの）から外れるようなものだけを「捨て仮名」と呼ぶことがあり、ここでは、その用法を意識している。

(24) 亜阿愛葵茜梓絢綾安杏空吾彩采朱青蒼天碧歩麻明有晏

(25) 第三版（2005:421–437）では「娃」が加わる。2004年に人名用漢字に加えられたものである。以後、現在最新の2023～2024年版（pp.197–209）まで、「あ」で引ける漢字は増加していないことを確認した。なお、たまごクラブ編の名づけ本において、これら「読み（方）別漢字リスト」で示されるのは、所在ページではなく画数である。漢字の説明部において、画数順で並べてはあるが、漢字を見出すのは、たやすくはない。

(26) 「彩」を「あや」と読むことについては、新野（1996）にある名乗り字や吉田（1951）にも（国語協会（1940）には「彩」字なし）、長島豊太郎『古字書索引』などにも見えず、漢和辞典類の多くが、この読みを載せていなかった（特に「音訓索引」には見えなかった。『広漢和辞典』『角川大字源』『岩波漢語辞典』の索引には見えるが、『新大字典』『大漢語林』『学研新漢和大字典』『漢字源』などの索引に見えず、『新字源』でも2017年の改訂まで見えなかった。『新字源』「人名要覧」には当初より見えるが、『新字源』における「人名一覧」の収載は昭和53年頃からである）ことなどから、比較的新しい読みではないかと見ていた（松平（1956:82）に、音読サイのみを載せ、「ツヤなどの読みは避ける」、佐久間（1981:350）に「彩」のアヤを「〝綾〟の字より新鮮」とする）が、荒木（1959）にもあり、『四声玉篇和訓大成』（寛政）に、この訓が見える。現在の漢和辞典類の多くが、毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』（「彩」の訓は、本文で「イロドル」、頭注で「ヒカリ」）系統にあることをうかがわせもする。なお、近代の漢和辞典類でも、塚本哲三『袖珍漢和辞典』大正4年、服部宇之吉『大漢和辞典』大正14年、など、音訓索引で「あや」から「彩」が引けるものもある。

(27) 「名乗」という語の使われ方の歴史についても気になるところであるが、調査出来ていない。

(28) 「央」のオは長音の短呼とも解釈出来るものでもある。長短の通用は、ある頃までは、字音間や字音と万葉仮名とに長短（ないし韻尾ウの有無）のあるものなどを除いて、ユとユウの通用に限られていた（たまひよ（1995）の「読み方別漢字リスト」でも「ゆ（う）」で「夕友」字などが示される（個々の字の説明箇所では「友祐」などでは、ユウは片仮名で「ゆ」は平仮名で表記されている）が、このような「う」の有無に関する包摂は他の項にはない（「あつ（し）」などが多い）ものである。たまひよ（2023）でも、これらは継続している、なお、古くは富永（1957:154）で「夕勇雄裕猶」などをユにあてている）が、拡大していった。

(29) 「とる」という表現では、採用とも削除とも解されるので、「抜

く」を使ってある。抜擢の「ぬく」であるとの解釈もあるだろうが、「とる」ほどの両義性はなかろう。「省く」を使おうかとも思ったが、省く前の形を意識して使っている感じがあり、「抜く」にした。

(30) 韻尾のイの表われ方には漢字音の問題がある（「娃」字をアともアイとも読むことなどと関連する。岡本（1968）参照）。上掲のように、「る」の仮名の字母に「累類」などがあるようなこともある。

(31) Wikipediaでは、「ん」で始まる名が、現在1人確認出来る（Japanese Wikipedia personal name extractor https://github.com/hiroshi-manabe/extract_jawp_namesで2023年8月29日に取得したデータによる）が、仮名表記である。（豊岡んみ。本名不明）

(32) 田口（2016）で「鞠」をクと読ませているが、これは韻尾を採用したのではなく、熊本の地名ククチに地名字音転用で「鞠智」字を宛てた（「菊池」も同様）ところからの展開で、韻尾を消したものであろう。

(33) 命名の際に、字画による姓名判断を考慮することは、根強いようで、名づけ本の多くが、姓名判断に関わる人を監修者に加えるなどして、画数による吉凶を載せ続けている。

(34) 「昴」字が使えない時代に「昂」字で「すばる」と読ませた人が居たが、「昴」字が使えるようになっても、この二字の通用はあるようで、「昴」字を「こう」とよむ人が居る。

(35) 小林祥次郎（2008:248-255）など

(36) 注5参照。

(37) 送り仮名と対になる「迎え仮名」。「オノズカラ」と「ミズカラ」とを区別するために「自ラ」「自ラ」、ないし、「オ自ラ」「ミ自ラ」などと書いてあるものを「迎え仮名」と呼ぶが、「愛茜」でアカネ、「美操」でミサオなどを迎え仮名にあたる万葉仮名的文字遣いと見る。

(38) 『日本国語大辞典』では、一八世紀末の柳多留の用例を載せる。

参考文献

本文中に言及のないものもここに残したが、閲覧した名づけ本の類の全てを挙げてはいない。名づけ本など、所謂実用書の類には初版年が書かれていないものも多く、示した年は、奥付やカバー袖刊記の刊年、奥付などに©で示された年、など様々である。「たまごクラブ編」「たまごクラブ・ひよこクラブ特別編集」などは、本文中では一括して「たまひよ」とした。

朝霧しずか（1986）『すぐに役立つ赤ちゃんの名づけ方百科』ナツメ社

阿辻哲次・黒川伊保子（2008）『女の子の【幸せ】名づけ事典』ナツメ社

荒木良造編（1959）『名乗辞典』東京堂出版

池上禎造（1952）「名乗字」『国語・国文』一九五二年十月『漢語研究の構想』岩波書店、一九八四年

池上禎造（1976）「漢字と日本の固有名詞」『懐徳』第四六号、一九七六年十月『漢語研究の構想』岩波書店

伊東ひとみ（2015）『キラキラネームの大研究』新潮新書

岩淵悦太郎・柴田武（1964）『名づけ』筑摩書房

内田一郎（1990）『〈新しい〉赤ちゃんの名前事典』池田書店

SE編集部（1991）『日本語入力読本』翔泳社

岡島昭浩（2008）「〈五音歌〉の変容—外郎売りと姓名判断—」『テクストの生成と変容』

岡島昭浩（2014）「『韻鏡安見録』と『韻鏡反切名乗即鑑』」『語文』102

岡本勲（1968）「日本漢字音に於ける規範と事実—佳（カ）掛（クワ）畫（グワ）汰（タ）・牲（セイ）・甥（セイ）等の字音を続って—」『国語国文』37（7）

荻原祐二（2015）「近年の日本における個性的な名前の特徴とその類型」『人間環境学研究』13（2）

荻原祐二（2023）「人名の読み方とその不確定性：実証研究の概観」『日

本語学』2023年夏号〈42巻2号〉
奥富敬之（1999）『日本人の名前の歴史』新人物往来社
香川織江（1986）『赤ちゃんの幸せ名づけ事典』日本文芸社
学研辞典編集部（1990）『ワープロ漢字辞典』学習研究社
菊田将克ほか（1989）『最新日本語FEPハンドブック』秀和システムトレーディング
紀田順一郎（2002）『名前の日本史』文春新書
紀田順一郎（2003）「当世名付け事情」『しにか』二〇〇三年七月
桐山智子（2021）『タカラヅカ 百年の芸名』武蔵野書院
国脇泰秀（1992）『個性で選ぶ新しい赤ちゃんの名前』西東社
現代言語セミナー（1986）『遊名字典』平凡社
河野六郎（1994）『文字論』三省堂
国語協会（1940）『標準名づけ読本』婦女界社
小林国雄（1967）『現代人の国語辞典』東京法令出版　（1969の改訂10刷による）
小林祥次郎（2008）『新装増補版 日本のことば遊び』勉誠出版　もと2004
小林康正（2009）『名づけの世相史 「個性的な名前」をフィールドワーク』風響社
今野真二（2023）「日本語における漢字列」『言語研究』164
佐久間英（1978）『増補改訂新版 赤ちゃんの名前』大泉書店
佐久間英（1981）『増補改訂新版 赤ちゃん名づけ百科』百三版　大泉書店 初版は1969年。増補前のものは未参照。
笹原宏之（2023）「日本における命名文化とその読み仮名―「愛」を中心に―」『日本語学』2023年夏号〈42巻2号〉
佐藤稔（2007）『読みにくい名前はなぜ増えたか』吉川弘文館
澤崎文（2020）『古代日本語における万葉仮名表記の研究』塙書房
柴田武（1955）「日本の人名」『講座日本語2日本語の構造』大月書店
柴田武（1977）「命名の言語学」月刊言語1977.1（柴田武『方言の世界』所収）
芝野耕司（1997）『JIS漢字辞典』日本規格協会
寿岳章子（1979）『日本人の名前』大修館書店
寿岳章子（1982）「現代の命名法」『講座日本語の語彙7現代の語彙』
西東社編集部（2014）『赤ちゃんの名前ハッピー漢字事典』西東社
高島照永監修・名前プロジェクトN・E（2006）『赤ちゃんに最高の名前を贈る本』永岡書店
田口二洲（2016a）『男の子の名前辞典』新星出版社
田口二洲（2016b）『女の子の名前辞典』新星出版社
田嶋一夫監修（1990）『最新JIS漢字辞典』講談社　編集協力（財）日本規格協会
たまごクラブ特別編集（1995）『最新版 たまひよ名づけ百科』ベネッセコーポレーション　田宮規雄監修　年記は刊記の©とカバーの背横の年記による。奥付に平成7年4月発行とあるもの（「©福武書店1995」）、平成8年4月発行とあるもの（「©ベネッセコーポレーション1995」）、平成9年2月発行とあるものを参照。平成9年のものは、「名前ベスト100」などに違いがある。
たまごクラブ・ひよこクラブ特別編集（1997）『最新版たまひよ名づけ実例全集』ベネッセコーポレーション
たまごクラブ特別編集（2001）『たまひよ名づけ百科 決定版』ベネッセコーポレーション　田宮規雄監修
たまごクラブ編（2003a）『たまひよ名づけ大百科』ベネッセコーポレーション　田宮規雄監修
たまごクラブ編（2003b）『たまひよ版 赤ちゃんのしあわせ名前事典』ベネッセコーポレーション　田宮規雄監修
たまごクラブ特別編集（2007）『最新名づけ大百科』ベネッセコーポレーション　田宮規雄監修

たまごクラブ特別編集（2016）『赤ちゃんの名づけ新百科』ベネッセ
コーポレーション　栗原里央子監修
たまごクラブ編（2012～2022）『たまひよ版 赤ちゃんのしあわせ名前
事典』ベネッセコーポレーション
角田文衛（1980-1988）『日本の女性名』教育社
東伯聰賢（2013）『赤ちゃんのハッピー名前事典』西東社
富永吉郎（1957）『これからの名前のつけかた』泰光堂
中野洋監修（1987）『親の願いを叶える 赤ちゃんの名前』二見書房
新野直哉（1996）「名乗り字一覧」『漢字百科大事典』（もと『漢字講座
6中世の漢字とことば』明治書院1988）
西沢秀雄（1960）『愛児の名づけ字典 正しい命名』日東書院 https://
dl.ndl.go.jp/pid/2965405（昭和41年の奥付のもも同内容）
早田輝洋（1977）「日本語と表音文字」『現代作文講座6文字と表記』明
治書院
松平光生（1956）『正しく新しい名前のつけ方』金園社
森岡健二（1977a）「日本人の名前」月刊言語1977.1
森岡健二（1977b）「命名論」『岩波講座日本語2 言語生活』
森岡健二・山口仲美（1985）『命名の言語学　ネーミングの諸相』東海
大学出版会
箭内敏夫（1994）『電脳辞書の国語学』おうふう
山口晴久（1992）『選んでつける 赤ちゃんの新しい名前』高橋書店
弓削悟（1996）『パパとママの 赤ちゃん名付け百科』成美堂出版
吉田澄夫（1951）『名まえとその文字』文部省　『覆刻文化庁国語シリー
ズ6漢字』1974による
脇田直枝ほか（1986）『いい名前・悪い名前・普通の名前　名前はコ
ピーだ！』四海書房
渡辺三男（1958）『日本人の名まえ』北辰堂
渡辺三男（1967）『日本の人名』毎日新聞社
渡辺三男（1973）『明解名づけ事典』毎日新聞社
『月刊言語』一九七七年一月号　特集　命名
『日本語学』一九九一年六月号　特集　命名
『しにか』二〇〇三年七月　特集　日本人の名前と漢字

付記

本稿は、二〇二二年一一月六日に、漢字ミュージアムで行った講演「人名に使われる漢字の用法について」に基づく部分が大きい。講演の広報の際、「漢字の表音文字化」という表現をとったが、これは本稿に書いたように、表語文字である漢字の表意機能と表音機能の分離が略訓の拡大によって推進されている様子を示そうとしたものであり、「表音文字化」は適当ではない表現であった。また、同講演では、ケーススタディとして「愛」の字の多様な読まれ方（読ませ方）を取り上げたが、これは、笹原（2023）と重なる部分も多く、本稿では多くを省略した。

（おかじま・あきひろ　本学教授）